
doll—人形少女—

莉乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

doll―人形少女―

【Nコード】

N9004M

【作者名】

莉乃

【あらすじ】

彼女の名前は月宮雪華。つきみやゆきか

綺麗な顔立ちと抜群なスタイルでモテモテ。

しかし彼女の瞳には光はない。

目に映るのは闇だけ……。

飽きるほど血をみた彼女に感情なんて存在しない……。

彼女はなぜ、そうなってしまったのか……

プロローグ

ねえ、あたし、お人形さんみたいになりたいの。

そうなんだ。じ

や、僕のお人形さんになる？

え？ お人形さんになれるの？

でもどうしてお

人形さんになりたいの？

お人形さんって綺麗でしょ？ 目が大きくて肌が真っ白で綺麗で。

キミも同じくら

い綺麗だよ・・・？

それに、何も考えなくて済むじゃない？

感情・・・のこ

とかな？

かんじょう？

そう。悲しいと

か嬉しい、辛いとか・・・。

そうそう！ そんなのいらないの。

なるほどね。

だからお人形さんになりたいの・・・。

いの？

本当にそれでい

うん！

じゃ今日からキ

ミは僕のお人形さんね。

もう逃がさない

よ・・・

殺し屋、月宮雪華。

彼女の名前は月宮雪華。つきみやゆきか

年は17歳で、高校2年生。

季節は冬……。

グシュッ!!

「ぐあああああ」

何かの刃が柔らかいものを刺すような音と何かが噴出す音、そして悲鳴。

「……ターゲット古川泰造、謝礼金2億、依頼完了……」

彼女は冷静にそう呟いた。

そしてすぐにどこかに電話をかけた。

電話の相手は彼女の主人。マスター

《もしもし、依頼完了しました。今から戻ります》

《……分かった》

電話が終わると彼女はすぐにどこかへ消えてしまった……。

彼女が向かった場所はあるビル。

表向きは普通の株式会社。

しかし裏は……。

「ただいま帰りました」

「おかえり、doll girl。依頼は完了できたみたいだね・
・殺しの」

そう・・・ここは殺し屋のアジト・・・。

雪華は“doll girl”という通り名で殺しをやっている。
殺し屋には世界ランクや国内ランクがある。
ちなみに雪華は世界3位。

1位は雪華の目の前の主人で2位は誰なのか雪華は知らない。
主人が隠そうとするのだ・・・。

「はい。ものの3分でできました」

「相変わらず仕事が速いね・・・」

主人は苦笑しながら雪華の頭をなでる。
雪華はニコツと笑う。

しかしそんな彼女の瞳には光はない。
目に映るのはひたすら闇。
どこまでも闇。

何も映さない、感情のない目。
彼女には“感情”がないのだ・・・。

殺し屋の日常。

報告がすんで彼女は家に帰る。

彼女の家はちよつと大きめのマンションの一室。

家賃は大体月28万。

しかしそんな金額も高校生なのに彼女には大したことのない金額なのだ。

殺し屋は有名になればなるほど仕事が入ってくる。

仕事が入ればお金も入る。

ただでさえ、ひと1人殺すのに約1億が入ってくるのに、1日に2、3件^ゃ殺つていれば
だいたい3億入るのだ。

要するに、彼女はお金に困るところか余っているのだ。

彼女にはショッピング以外に趣味はない。

1日2億ぐらい使わないとお金が減らないため、ショッピングでは
毎回

結構な量を買っているが、それもたったの500万くらいにしかない。
らない。

それ以外に趣味がないため、お金がどんどん増えていくのだ。

余るのが嫌で何回かどっかの国に募金したりもしているが、それでも意味がない。

「もうそろそろ引越ししようかな・・・?」

彼女はベッドの上で通帳を眺めながらつぶやいた。

淡い茶色のさらさらロングヘアに、クリンとした二重の目。
頬はほんのりピンクで小さい唇。

小動物のような彼女はそれはそれはモテモテだ。

でも彼女はそんなことどうでもいい・・・。

—みんな外見だけで寄ってくる・・・

彼女はそんな冷めた考えを持っていた。

「とりあえず、メイク落とそう」

彼女は洗面台に行き、1つ何十万もするクレンジングオイルでメイクを落とし、

同じく高級品の洗顔でまた顔を洗い、ふわふわのタオルで顔を拭く。

そしてお風呂にはいり、30分後、彼女はまたベッドの上にいた。

プルルルル・・・プルルルル・・・

「あ、電話だ……翔太……」

翔太とは雪華のボーイフレンド、つまりは恋人で掃除屋をしている。掃除屋の中では世界1位だ。

《もしもし》

彼女は幸せそうに電話にでる。

外見じゃなくて性格を見てくれたのはこの人だけ……。

雪華はそんなことを思っていた。

《もしもし、雪華？ 翔太だけど、起きてた？》

《今仕事終わって家に帰ってきたところ》

《そっか。お疲れさん》

《……翔太は？》

《俺は今終わったとこ。今日は3件だったから》

《そうなんだ》

それから約40分後、電話が終わり、彼女は眠りについた・・・。

殺し屋の日常。 2

翌日。

彼女はいつも朝6時に起床する。

「ふああ・・・」

雪華はさきにお風呂に入り、シャワーを浴びる。
髪を乾かし、巻き終わった後、学校の制服を着る。

雪華は表向きは普通の高校生で翔太と一緒に学校にいる。

そして朝食を作り、食べた後、メイクをする。
そんなこんなであったという間に7時45分・・・。

ピンポン・・・ピンポン・・・

「はい！」

雪華は小走りで玄関に急ぎ、ドアを開ける。

「雪華、おはよう」

「翔太、おはよう。ちょっと待ってね」

雪華はすぐにローファアを履き、学校に歩いて登校していく。

「あ、雪華ちゃんと翔太くんだ」

「お似合いだね〜！ あの2人」

「あ〜ん！ 翔太くん狙ってたのに・・・」

「あんたじゃ無理！！」

「俺も雪華ちゃん狙ってた」

「お前もかよ・・・まあ俺もだけど」

そんな会話を視界の端に見ながら雪華は翔太と会話を続ける。

雪華と翔太は違うクラスでお弁当を食べる時しか学校では一緒にいない。

「雪華おはよ〜！」

「おはよう、愛莉」

話しかけてきたのは友達くろみやあいりの黒宮愛莉。

同じクラスで雪華の一番仲のいい女の子だ。

「おっはようん」

「おはよ〜」

次に来たのが福原瑠亜ふくはらあと相沢琴未あいざわことみ。

2人は幼馴染でいつも一緒にいるが、性格は正反対。

雪華の毎日はこの3人とともにする。

愛莉と瑠亜と琴未は雪華と同じ、殺し屋だ。

はじめは知らなかったものの、主人マスターからの紹介で、みんな顔合わせの時に

気づいたのだ。

もちろん学校にはこのことは秘密である・・・。

殺し屋の日常。 3

学校で授業を受けて帰るときは愛莉と瑠亜と一緒にだ。

翔太とは一緒に帰らない。

雪華たちは3人である場所に向かう・・・。

マスター
主人の所だ。

「主人、今学校が終わりました」

私が先に主人に報告する。

「今日も何も以上はありません」

「主人は何もお変わりありませんか？」

それに続いて愛莉と瑠亜も主人に報告と質問をする。

これは昔からの決められたルール。

主人が私たちが心配だからと・・・。

「そうか・・・俺も何も変わらない」

そう返事が返ってきたら3人は主人のところから去る。

そして3人は洋服を買いに行く。

ただのオシャレではない・・・。

「これいい！」

「だよね！ 血が目立たなさそう！ それに暗闇でも分かりにくそうだしね！！」

そう・・・。

依頼を効率よく成功させるための服を買いに行く。

基本的条件は、目立ちにくい色、血が目立たない繊維、暗闇にいても気づかれない色、動きやすいこと・・・。

依頼によってはパーティもあるからいつもこうというわけではないが、

基本仕事をこなすときはこの条件がぴったりののだ。

「でもこれヒラヒラしすぎて動きにくそう」

「確かにそうだね」

「今あたしもそれ思った」

「これはどう？」

そういつて雪華は黒いTシャツを見せた。

「下にはこのGパンで・・・」

そういつてさらに真つ黒なGパンを見せた。

「それいい〜!」

「あたしそれ買う」

「あたしも」

「雪華も買うでしょ?」

「もちろん」

洋服を買ったあとは靴を買いに行く・・・。

これもただのオシャレではない。

「これ動きやすそう!」

「いいね」

「あたしはこっちな?」

「じゃあたしはこっちのスニーカー!」

「あたしはこのスニーカー」

とこんな感じで買い物は終了する。

依頼？

その日の夜、23時・・・。

プルルルル・・・プルルルル・・・

雪華の仕事用の携帯が鳴った。

その携帯に登録されているのは主人と殺し屋、掃除屋。
マスター

そのほとんどは主人からの雪華への依頼の連絡。

今日もきつとそうだろう・・・。

《・・・もしもし》

雪華は電話に出た。

《もしもし、dollか？》

《当たり前じゃないですか》

《ははは。そうだな》

どうやら主人かららしい。

《で、ご用件は？》

《依頼だ。依頼主はコニシマリ。ターゲットはヤマダチカ。》

用件はやはり依頼だ。

《・・・年齢は？》

《二人とも19歳だ。コニシマリは財閥の一人娘。それなりに金もある》

《なるほど・・・》

《ヤマダチカはコニシ財閥と争っているわけではないが、コニシマリの好きな男が
ヤマダチカのこと好きらしい・・・情報によるとな》

《そうなんですか》

《ああ。ヤマダチカは今。。。区の××ホテルのパーティに出席している・・・パーティは
明日の夜まで続くそうだ》

《・・・分かりました》

《それとチケットがいるらしい。コニシマリが送ってきたチケットを今からファックスで送る》

《はい。それでは失礼します》

雪華は電話をきるとすぐにノートパソコンを取り出し、カタカタといじりだした。

雪華はすぐに“ヤマダチカ”を検索する。

「・・・こいつか」

ヤマダチカは白い肌に大きい目でさらさらの黒髪、大和撫子という表現がピッタリだ。

普通なら・こんな綺麗な人を殺すなんて・・・と思う人もいそうだが、

雪華には顔なんてどうでもいいのだ。

依頼が来たから殺すだけ・・・。

それ以外理由なんて無い。

それが雪華だ・・・。

次に雪華はパーティ会場の様子を探るために会場内のシステムに侵入する。

そう、ハッキングだ。

いともたやすくシステム内に侵入でき、監視カメラを確認する。

「・・・いた」

ヤマダチカは着物ではなく、ピンクのロングドレスを着て、綺麗な身なりをしている。

その隣には20歳ぐらいの男がいた。

軽めの茶髪に整った顔立ち、スーツを着ている。

どうやらこの男がコニシマリの好きな人・・・。

そしてその二人を5メートルほど先で見つめる、いや睨む女がいる。

「これがコニシマリか・・・」

コニシマリはヤマダチカみたいに綺麗ではなく、可愛いの種類に入る。

茶髪の紙を巻いていて赤のミニドレスを着ている。

コニシマリは顔をゆがませ、髪を人差し指でくるくる巻きながらそ

の光景を見ていた。

ハッキングが済んだところで雪華は準備をした。

パーティということなのでドレスを探す。

白のロングドレスに白のヒール。

髪は軽く巻くことにした。

そしてメイクをちょっと濃い目にして<いつもは薄め>主人から届いたチケットを持って家の前にでた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9004m/>

doll—人形少女—

2010年10月20日20時16分発行